

第5章 古代以降の調査

第1節 調査の概要

1 遺構の配置(第73～76図、PL3・7)

古代以降の遺構は、削平の著しい1区平坦部の東半部を除く、調査地のほぼ全面で検出した。遺構検出面は、1区丘陵斜面部と2区ではⅡ層下面、削平を受けている1区平坦部ではⅠ層下面である。なお、Ⅱ層は平安時代までの遺物を包含するものの、その堆積時期の下限は不明である。

1区では須恵器窯跡3基(うち2基は瓦陶兼業窯の可能性あり)と灰原3箇所からなる須恵器窯関連遺構群と、製鉄炉1基、製鉄炉が構築されたテラス1基、製鉄炉から派生する流出溝2基、排滓場2箇所からなる製鉄関連遺構を検出した。また、その他に道路遺構2条、炭焼窯1基、自然流路1条を確認した。2区では炭焼窯22基、瓦溜まり2箇所、溝状遺構2基を検出した。

須恵器窯関連遺構群と製鉄関連遺構は、いずれも1区南部の丘陵斜面から斜面裾にかけて広がっており、近接した位置関係にある。

須恵器窯関連遺構群はF7～9、G7～9グリッドに位置している。須恵器窯跡3基は丘陵斜面に立地し、それぞれ2～3m程度の間隔を置いて南北に並んでいる。灰原3箇所はその東側の丘陵裾から平坦部にかけて広がっている。

製鉄関連遺構は、須恵器窯関連遺構群の南西側、G9・10、H9・10、I9グリッドに位置する。製鉄炉と作業場となるテラスは丘陵斜面中腹に立地し、排滓場2箇所はテラスから派生して斜面裾にかけて広がっている。

2条の道路遺構は1区丘陵部裾に沿って南北に断続的に延びて、調査地全体を横断しており、さらに調査地外に続いている。西側のものを道1、東側のものを道2とした。いずれも須恵器窯関連遺構群を切って造られており、これに後出することが確実である。道路遺構の掘方は幅60cm前後、深さ50cm前後で、埋土は須恵器窯関連遺構群と重複する部分では灰原の二次堆積土が、それ以外ではⅡ層に類似した流土が堆積していた。古代の自然流路は1区平坦部のF6・G6・G7グリッドに存在する。

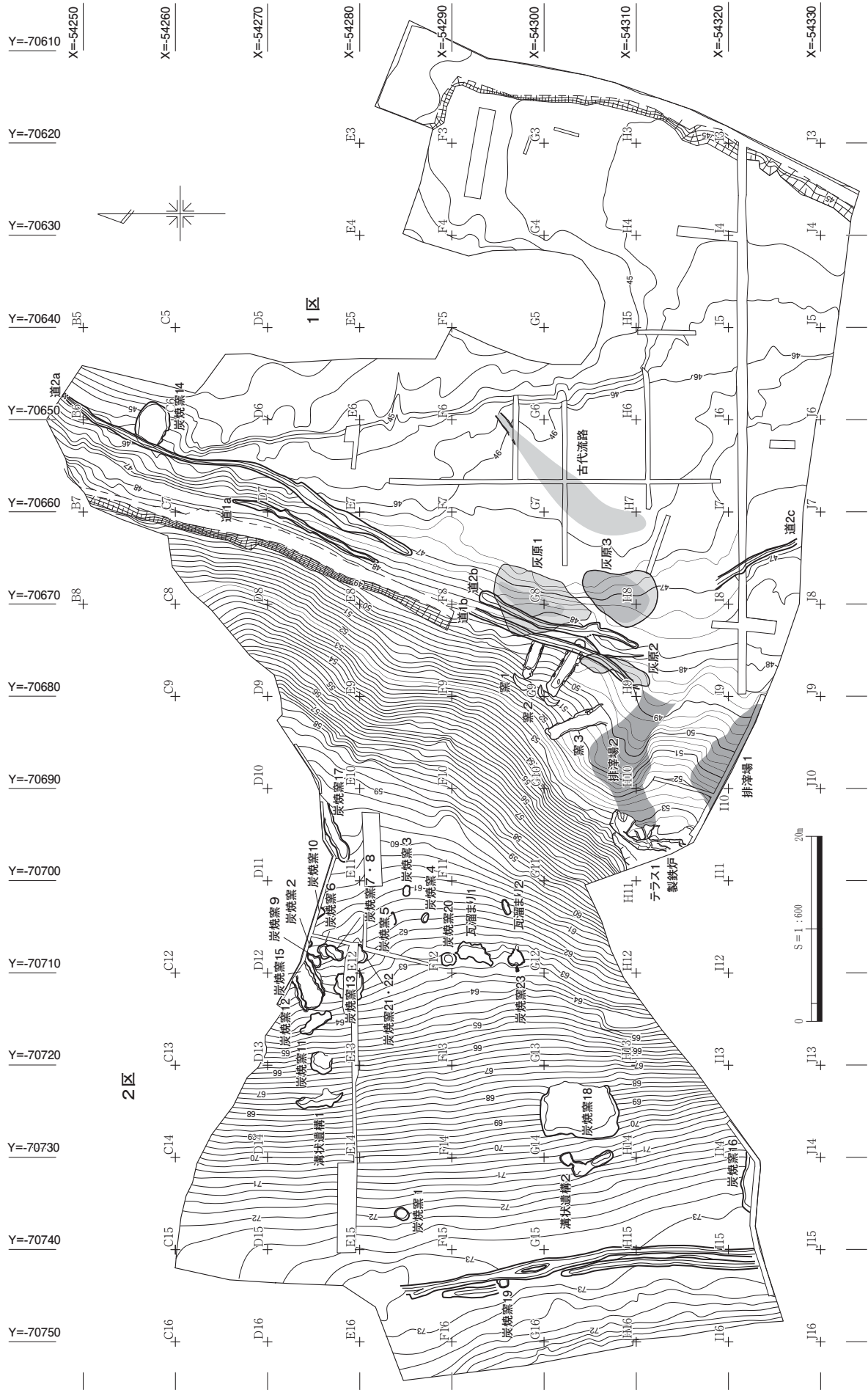
炭焼窯は調査地全体で23基検出しており、うち1基のみが1区北端部の丘陵裾で検出したが、他はすべて2区で検出した。2区の炭焼窯の多くは、テラス部とその西側の緩斜面に集中している。その集中範囲から外れた位置にもいくつかの炭焼窯が存在するが、丘陵上に立地する1基(炭焼窯19)以外は、丘陵斜面に立地している。なお、炭焼窯11・18の斜面高所側には、それぞれ1基ずつ溝状遺構が近接しており、いずれの溝状遺構も隣接する炭焼窯に関連する遺構と考えられる。

2箇所検出した瓦溜まりも、多くの炭焼窯と同じく、2区テラス部からその西側の緩斜面にかけて立地している。

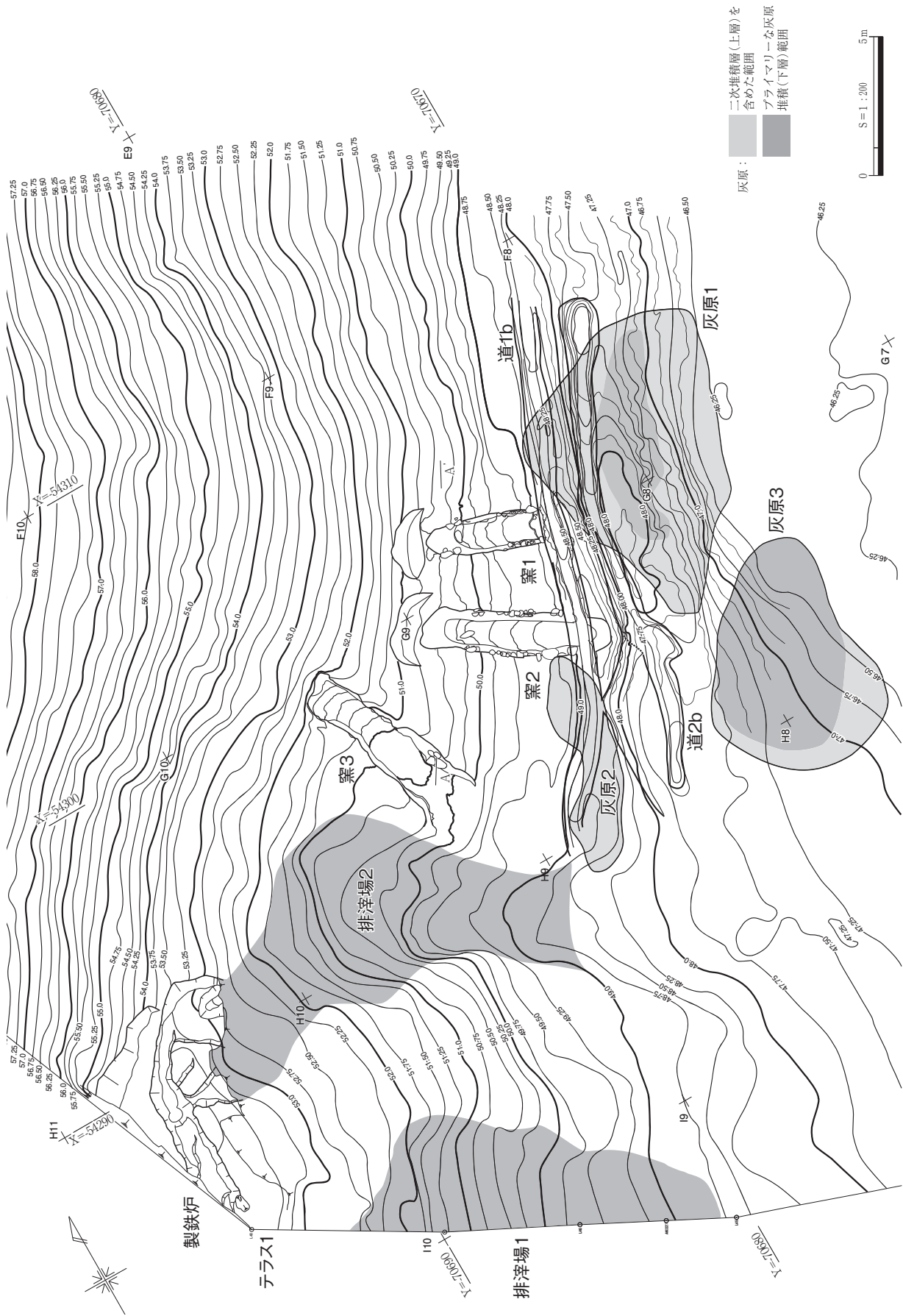
2 遺構の時間的關係

古代以降の遺構のうち、出土遺物や放射性炭素年代測定値から、古代に帰属すると判断したものは須恵器窯関連遺構群、製鉄関連遺構、炭焼窯18基、瓦溜まり2箇所、溝状遺構2基、自然流路1条である。炭焼窯のうち5基(炭焼窯19～23)は近世に帰属すると判断した。道路遺構2条の詳細な時期は不明である。

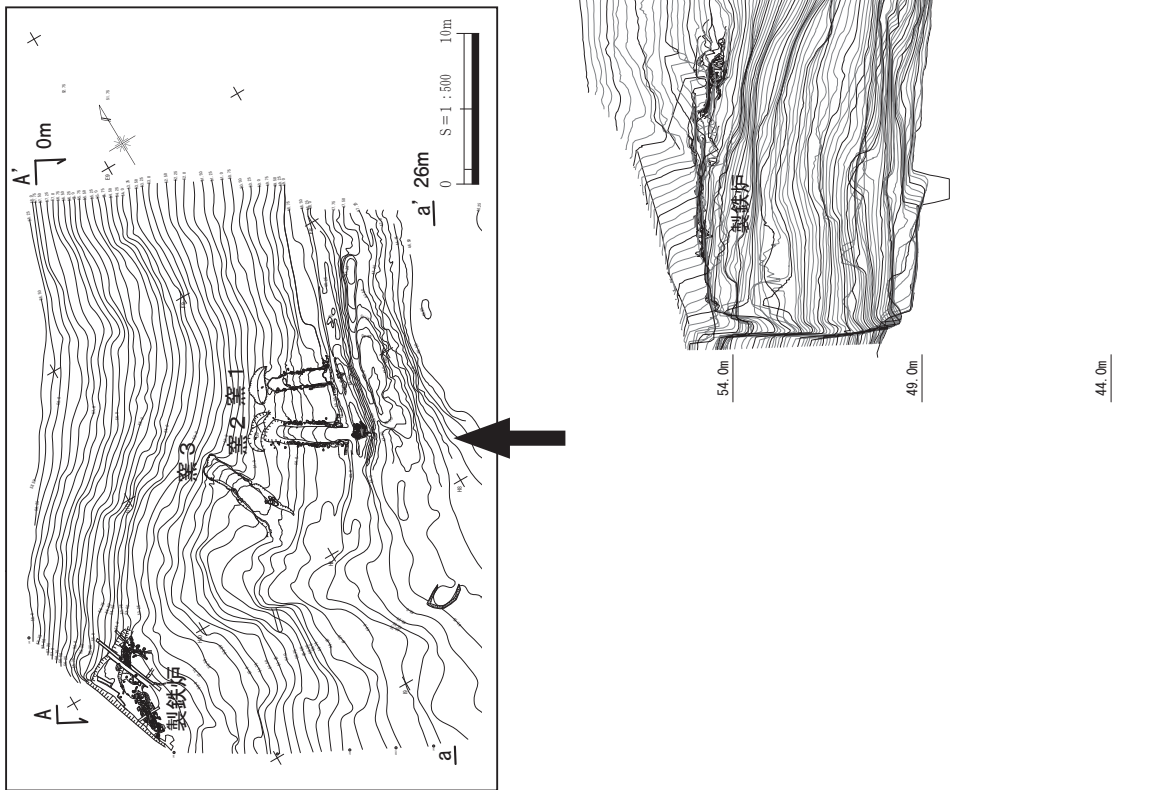
須恵器窯関連遺構群の時期は出土した須恵器から平安時代前期(9世紀)と判断した。これらの須恵



第73図 古代以降の遺構配置

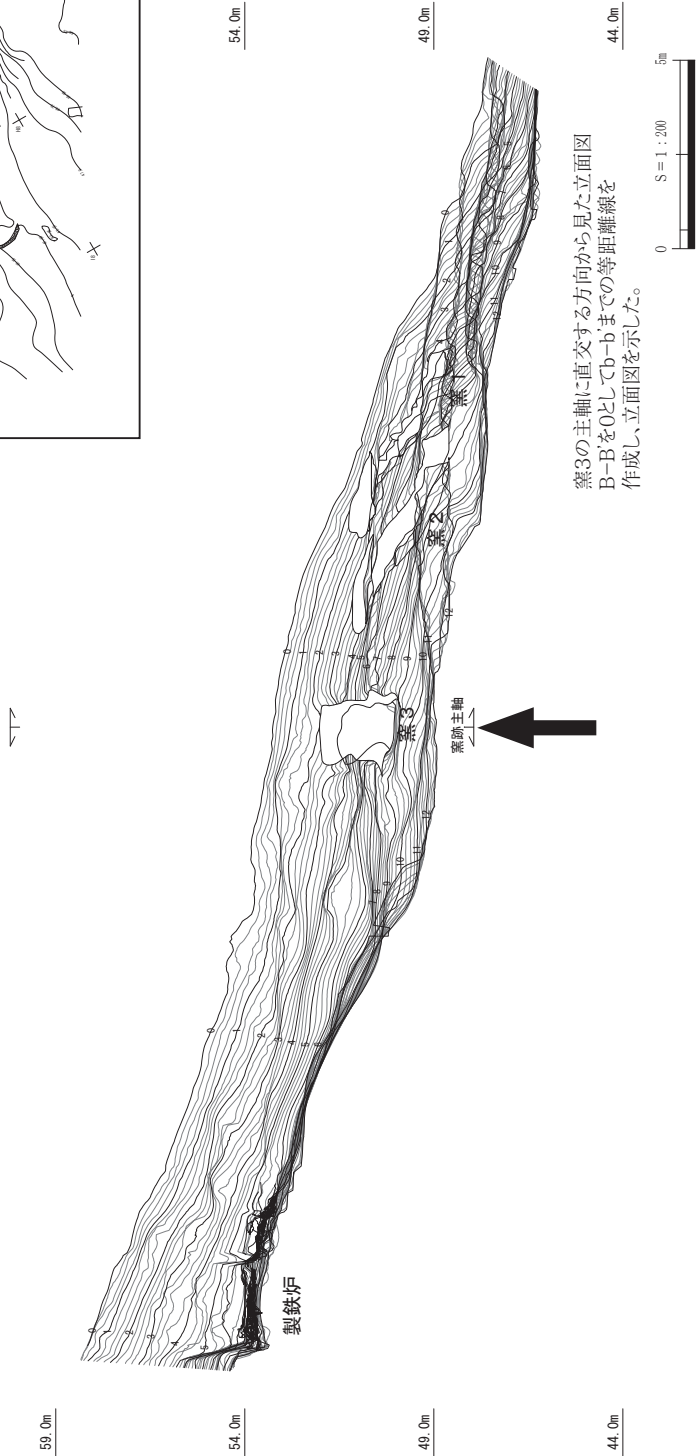
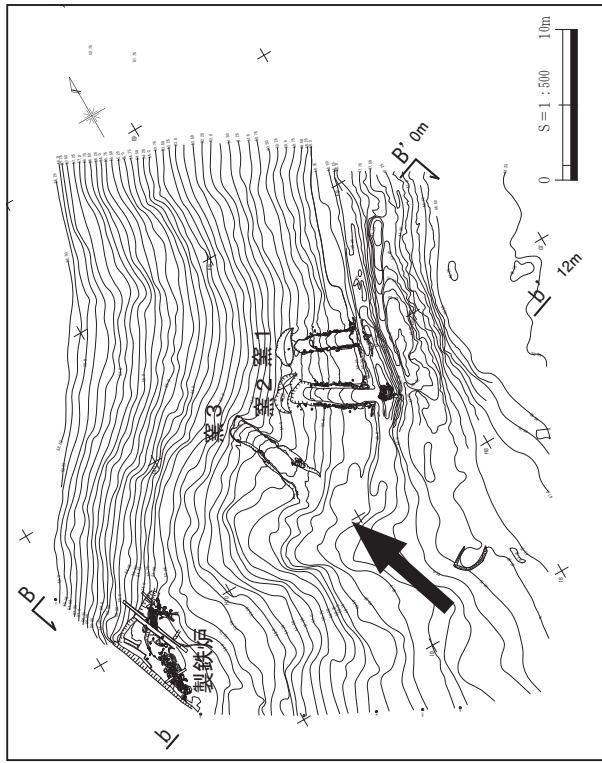


第74図 須恵器窯関連遺構群・製鉄関連遺構の配置



窯2の主軸に直交する方向から見た立面図
A-A'を0とし、a-a'までの等距離線を
作成し、立面図を示した。

第75図 須恵器窯関連遺構群・製鉄関連遺構立面図(1)



窯3の主軸に直交する方向から見た立面図
 B-B'を0としてb-b'までの等距離線を
 作成し、立面図を示した。

第76図 須恵器窯関連遺構群・製鉄関連遺構立面図(2)

第5章 古代以降の調査

器には型式差はほとんど認められず、須恵器窯3基はほぼ同時か連続して構築、操業している可能性が高い。ただし、窯毎に多少の形態差は存在し、これを時間差とみれば完全な同時期操業ではないこととなる。実際、同時操業を想定するには隣り合う窯同士が近接し過ぎており、少なくとも3基同時には操業していなかった可能性が高い。詳細は後述するが、窯の構造や瓦の出土状況、須恵器の形態などから、窯3、窯1、窯2の順に、短期間に連続して操業したと考える(第6章第2節参照)。

製鉄関連遺構からも、本遺跡の窯で焼成した可能性が高い須恵器や平安時代前期の土師器が出土しているほか、放射性炭素年代測定でも遺物の時期と大きく矛盾しない年代値が得られているため、須恵器窯関連遺構群とほぼ同時期と考えられる。

また、両者の時間的關係を考える上で重要な遺物が、須恵器窯関連遺構群から出土している。それは製鉄に伴って生じた流動滓様の滓片が胎土中に混入した甕である(第148図：516 PL.99・100)。この甕が遺跡内(調査地内)で成形されたのであれば、その段階で既に製鉄炉が存在していた可能性が高い。ちなみに、516の甕は非常に大型で、おそらく窯3以外では焼成不可能である。したがって、製鉄炉は、少なくとも窯3の操業終了までには操業を開始しているといえる。なお、製鉄場の床面直上からは、516と同一個体の可能性が高い破片(第158図：562・563)をはじめ、本遺跡の窯で焼成された須恵器が出土しているので、製鉄炉と窯1～3のいずれかがほぼ同時に操業していた可能性も考えられる。ただし、製鉄炉の廃絶から埋没開始までに若干の時間差が存在した可能性もあり、この推定は確実ではない。しかしながら、常識的には、斜面に立地する製鉄場には流土が速やかに堆積したと考えられるので、製鉄炉の操業終了後に窯が操業を開始したとしても、両者にはそれほど大きな時間的な隔たりがなかったと考える。

2区の瓦溜まりからは大量の瓦が出土している。これらの瓦は、須恵器窯関連遺構群で出土した瓦と同じ特徴をもっている。したがって、2基の瓦溜まりは、須恵器窯などと同時期の、9世紀頃のものと考えられる。

炭焼窯19～23以外の炭焼窯は、放射性炭素年代測定の結果から概ね古代の範疇に収まると考えている。炭焼窯2～18は近似した測定年代が得られており、いずれも10～12世紀にかけてのものと判断した。ただし、炭焼窯1は6～7世紀に遡る年代値が得られているので、これらとは時期が異なっている。炭焼窯2～18は製鉄用の燃料木炭を生産した可能性を考えており、当初は製鉄関連遺構と近い時期のものと考えていた。放射性炭素年代測定の結果、それより1～3世紀ほど新しく、両者は直接的な関係をもたない可能性が高くなった。炭焼窯の年代は、この時期まで遺跡周辺で鉄生産が継続していた可能性を示すと考えられる。

以上のように、古代の遺構群は大きく2時期に分かれており、須恵器窯関連遺構群と製鉄関連遺構、瓦溜まりが9世紀頃、炭焼窯の大半は10～12世紀頃のものと考えられる。

第2節 須恵器窯関連遺構群

1 遺構群の概要(第74図、PL8-2)

須恵器窯関連遺構群は、窯跡3基と灰原3箇所からなり、先述のとおりいずれも近接している。

須恵器窯跡3基は構造が大きく2種類に分かれる。窯1と窯2は側壁に礫を用いる半地下式窖窯、窯3は素掘りの地下式窖窯である。規模は、窯1・2より窯3が大きい。窯1・2は全面的な壁面の修復と床面のかさ上げが1度行われており、2段階の変遷が辿れる。窯3は壁面の修復は確認できな

かったが、床面のかさ上げが2度行われており、3段階の変遷が辿れる。いずれの窯跡からも多数の須恵器が出土している。また、窯1・2からは瓦も出土しており、窯1・2は瓦陶兼業窯であった可能性が高い。窯1～3の出土須恵器に大きな型式差はなく、3基の窯はほぼ同時か連続して構築、操業されたと考えられる。

灰原は3つのまとまりがあり、それぞれに遺構番号を付している。しかし、灰原周辺は道1・2や林道の掘削、棚田の造成によって大きく乱されており、灰原本来の範囲やまとまりを保っていない。地形や遺物の接合関係からみて、灰原1と灰原3は一まとまりであったものが、削平によって2箇所に分断されたと考えられる。また、灰原2は二次堆積層のみから形成されており、プライマリーなものではない。灰原からは大量の須恵器と瓦が出土した。灰原出土須恵器は窯跡出土須恵器と同一の型式学的特徴をもっており、灰原は窯1～3の操業に伴って比較的短期間に形成されたと考えられる。

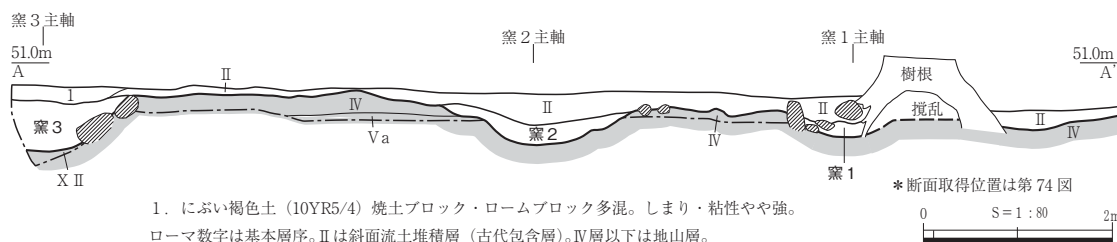
2 調査の方法

(1) ベルト設定と掘り下げ方法(第77・78・125図)

須恵器窯関連遺構群の表土除去はすべて人力で行い、その後に遺構検出作業を行った。窯跡はⅡ層下面で、灰原は表土・耕作土下面で検出した。窯跡の検出にあたっては、林道の切り通し断面でおおよその窯の位置が判断できたので、Ⅱ層を掘り下げる前に窯跡3基を通して横断する南北方向のベルトを設定し、各窯跡を被覆する流土の堆積状況や遺構検出層準を確認した(第77図)。その結果、窯跡はいずれもⅡ層のみに被覆され、その下面が検出面となることを確認したので、層序からは先後関係はつかめなかった。

遺構検出後、窯跡にベルトを設定した。窯跡は先述の通しベルトをそのまま残したほか、窯1・2は窯主軸に沿った主軸ベルト1本と、それに直交する短軸ベルトを3本設けた(第78図)。窯3も当初は同様のベルトを設定していたが、遺構の深さに対して幅が狭く、ベルトを残して調査できなくなったため、最終的には長軸で半裁して調査した。埋土の掘り下げは、短軸ベルト沿いのサブトレンチを先行して掘削し、堆積を確認しながら行った。窯1・2は新旧2段階の変遷があることが分かったため、掘り下げが新段階床面に達した段階でベルトを記録後除去し、新段階の遺構の記録作業を行った。その後、再度ベルトを設定して古段階埋土を掘り下げた。

灰原には合計6本のベルトを設定した。灰原1には窯1の主軸ベルトを延長して東西方向のベルトを設定したほか、それに直交する南北方向のベルトを設定した。また、1区丘陵東斜面から灰原1にかけて設定していたベルトも灰原の堆積確認に利用した。灰原2から灰原3にかけては、窯1主軸に平行する東西方向のベルトを通したほか、これに直交する南北方向のベルトを灰原3に設定した。そのほか、窯2の主軸ベルトも灰原3まで延長している。これらのベルトによって、灰原の堆積と窯跡・



第77図 窯1～3土層断面図

表37 須恵器・瓦の遺構別器種組成

遺構名	器種 (下段の数字は分類番号)																				合計																
	高台杯		杯	杯類	杯皿類	皿	高台皿	碗	蓋			長頸蓋		壺 (11)		水瓶	短頸壺	小壺	その他	平瓶		把手	瓶類		甕	甕or瓶	燗台	鉢	鉢鉢	硯	杯18	不明	平瓦	丸瓦	遺具		
	1	2							3	4	5	6	7	8	9								10	高台底												糸切底	水甕底
窯1	25	1	32	275	657	1165	56	153	1	1	3			118			1	1	1				8	85	3	9			10	56	1	2	2663				
窯2	4	10	15	233	352	690	40	42					78					3					11	154	7	3			13	196	5	1	1858				
窯3	3	14	19	79	123	85	5	1				4	1	41									21	291	3	3	15		1				709				
灰原1	50	8	305	1694	2496	5840	217	276	4	2	7	1	502	2	3		1	2	4	1	2		72	808	4	84	12	10	4	2	188	20	12621				
灰原2	5		45	130	190	480	23	26	2	1	3	5	109										14	107		13	2	3	1	20		1181					
灰原3	37	196	592	828	2322	88	122	4	4	6	10	454	1	1			1	4	5	1	1	2	57	644	15	30	10	4	6	160	2	1	5605				
灰原1周辺	3	1	12	23	43	101	29	1					13										2	72		3				16		319					
灰原2周辺	1		6	18	18	82	2	2				1	15										3	27						1		176					
灰原3周辺	2		26	72	56	275	8	9		1	6	39	2						1				7	96	1	1	1			24		627					
灰原1~3周辺	1		36	77	84	194	10	5		1	1	64											11	117	3	7	3			12	2	628					
灰原排土	3		11	46	75	150	7	13				40										1	11	51		1	4	1	12	1	427						
窯周辺			1		3	8	1					3											2	3		1						22					
古代流路	3	1	24	66	24	877	14	5		2	1	55											7	47	2	1	1		3	2		1185					
道1	3	1	31	97	127	510	13	22	2			40											1	4	55	2	5		1	49	4	967					
道2	2	1	22	59	72	306	5	5	2			37											8	67	1					25	5	619					
排滓場1	4		1	1	1	14						3											3	11	1	1	1			15	3	58					
排滓場2			25	72	83	146	20	16				3	64										14	34	1	5				151	34	668					
テラス1						10	2					1	6										1	14	1					24		59					
製鉄炉周辺	1			2		4						5											2	10								24	24				
炭焼窯3						2																								1		3	3				
炭焼窯4																								1									1	1			
炭焼窯14			1	1	2	1																		1						1		7	7				
炭焼窯17					2																												2	2			
炭焼窯23						1																									52	1	54	54			
瓦溜まり1																														242	14	1	257				
瓦溜まり2												2																		39	1	42	42				
1区表土等	39	2	208	515	415	1983	64	30	1	5	5	1	536	3	3	3	2						72	795	4	10	8	2	3	3	496	88	1	5298			
2区表土等						8	1					1												1						2	1	85	5	108			
2区包含層	2		13	3		8						6											1	4						3	1	588	89	1	719		
合計	188	39	1029	4055	5655	15262	605	728	16	1	21	43	9	2231	8	7	3	2	4	14	9	4	1	4	331	3495	48	177	55	21	9	5	41	2455	275	8	36858

灰原間の層位関係を確認することとした。まず、ベルト沿いにサブトレンチを掘削し堆積を確認したところ、灰原堆積土は間層を挟まず、細分することは不可能であると考えられたため、ベルトを残して面的に全体を掘り下げることとした。なお、灰原の堆積は最終的に上下2層に分離したが、上層は二次堆積層で、プライマリーな灰原堆積層自体は分層できていない。

(2) 遺物の取り上げ方法(第78・125図)

サブトレンチの掘削結果から、窯跡や灰原から出土する遺物は膨大な量になると予想できたため、出土位置をすべての破片について記録することは断念し、次のような遺物の取り上げ方法を採用した。

窯跡内で検出した須恵器や瓦、礫のうち、床面付近で出土したものについては原則出土状況図を作成することとした。ただし、微小な破片まですべて図化することは不可能であったため、一括で取り上げたものもある。

その他に、完形に近い須恵器や瓦、側壁に用いられていたと考えられる大型礫は床面付近でなくとも出土状況を図化している。そのほかの埋土中の遺物は、層毎に一括して取り上げている。その際、窯1・2については、窯のベルトを基準として区分けした、10のエリア(1N～5N・1S～5S)ごとに分けて取り上げた(第78図)。

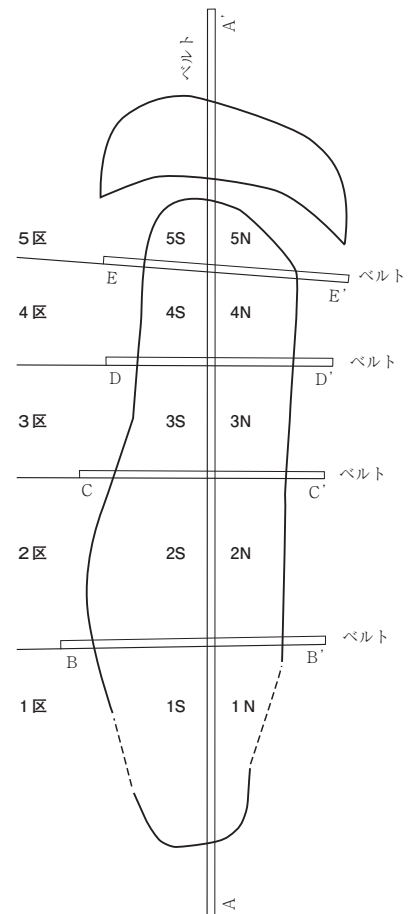
窯3は、先述のように、こうした調査方法を採用しなかったため、焚口、燃焼部、焼成部など、窯の部位を記録しながら取り上げたが、その振り分けには曖昧な部分があり、窯1・2ほど厳密な平面位置の記録ができていない。

灰原出土遺物については出土状況図を作成していない。遺物の平面的な位置は、灰原全域に窯1主軸(灰原1東西ベルト)を基準に設定した、1m間隔のグリッドメッシュによって記録することとした(第125図)。また、全体を層位的に掘り下げるのは非常に困難であると予想できたので、機械的に5cmずつ掘り下げることとし(いわゆる人工層位)、その掘り下げ単位毎に上から順に人工層位番号を付けて遺物を回収した。なお、最終的には灰原は上下2層にしか分離できなかったため、本報告では灰原遺物の出土層位を上層・下層の2つにまとめている。その際、上層から下層にまたがる可能性がある人工層位の遺物は、すべて上層に帰属させている。

3 出土遺物の概要

(1) 遺構別の出土量(表37)

須恵器窯関連遺構群とその他の周辺遺構を中心に、大量の須恵器や瓦が出土した。出土した須恵器や瓦はすべて器種分類を行い、それぞれ破片数を計数したところ(第1章第3節参照)、調査地全体で須恵器が34,120点、瓦が2,738点との集計結果が得られた。そのうち、須恵器は約8割が須恵器窯関連遺構群の出土であった。一方の瓦は、須恵器窯関連遺構群で約6割が、2区の瓦溜まり及びその周辺



第78図 窯1・2地区割り模式図

の遺物包含層で約4割が出土している。

須恵器窯関連遺構での須恵器出土数を見ると、須恵器窯跡のなかでは窯1からの出土が最も多く、次いで窯2が多く、窯3が最も少ない。ただし、詳細は後述するが、窯1出土の須恵器のうち半数近くは窯そのものではなく、灰原の堆積土などで埋め戻した土層から出土したもので、これを除けば窯1と窯2の出土量に差はほとんどない。灰原では灰原1の出土量が最も多く、灰原3の2倍以上の数の須恵器が出土している。灰原2は、二次堆積であることを反映して、出土量が非常に少ない。一方、須恵器窯関連遺構における瓦の出土数は、窯2が最も多く、次いで灰原1、灰原3から多く出土している。この3遺構はいずれも200点前後の出土数がある。窯1からも約70点の出土があるが、窯3からは1点も出土していない。

その他の遺構では、古代流路で須恵器が、排滓場2で須恵器と瓦が多く出土している。古代流路出土の須恵器は、灰原から二次的に移動したものが主体と考えられる。排滓場2の須恵器は遺構の位置関係からみて、窯3焼成のものが排滓場2に意図的に廃棄されたか、偶然流入したものが主体となる可能性がある。一方で瓦は、排滓場2の上方にある2区の瓦溜まりから転落したものが多いと考えられる。そのほか、窯1・2や灰原1～3を切って造られた道1・2の埋土からも、多数の須恵器や瓦が出土している。これらは窯や灰原から二次的に入り込んだものなので、基本的に須恵器窯関連遺構に帰属すると見てよいだろう。1区の表土や耕作土からも相当数の須恵器が出土しているが、既述のとおり、棚田造成に伴う削平によって、主として灰原の遺物が拡散したと考えられる。

(2) 須恵器の概要

出土須恵器の器種組成は表37に示した。器種数がかかなり多く、生産品の多様性がうかがえる。その一方、出土量は、小型品の杯類と皿類が圧倒的に主体となり、それ以外の器種では大型品の甕が比較的多い。もっとも、甕は個体あたりの破片数が多いと考えられるので、サイズの異なる器種同士を単純に破片数で比較するのは問題があろう。しかしながら、その点を差し引いても、杯・皿類に次ぐ生産品と位置付けうるだけの量がある。その他の器種では、長頸壺などの壺類や、横瓶などの瓶類、鉢はややまとまった出土数があるものの、鉄鉢形、小壺、蓋、硯、短頸壺は出土数のごく僅かである。以下、各器種について、それぞれの特徴を簡単に触れておく。なお、器種の分類基準については、第1章第3節にも記載している。

杯皿類

杯、皿には、高台付きのものと無高台のものがある。以下、前者を高台杯、高台皿、後者を杯、皿と呼び分けることとする。

- ・ **高台杯**：高台杯には、体部に1条の横走突帯を巡らせるものと(以下、突帯付高台杯と呼ぶ)、突帯のない一般的な高台杯がある。両者とも、底径が口径に比して小さく、底部から口縁に向かって開いた器形となる。少数の例外を除いて、高台の貼り付け位置は底部の端にあり、体部がほぼ直線的に立ち上がる。底部中央には回転糸切り痕が残されている。突帯付高台杯のほうが一般的な高台杯より大型である。
- ・ **杯**：高台杯と同じ器形ながら、高台をもたないもの。底部には回転糸切り痕が見られる。基本的に高台杯より小型である。ただし、ごく少量ながら、高台杯と同程度の大きさとなるものもあり、杯の中でも大きさによって複数の形式を設定可能である。
- ・ **皿**：底径が口径に比して小さく、体部はほぼ直線的に立ち上がる。杯の器高を著しく低くした形

態である。底部には回転糸切り痕を残す。

- ・**高台皿**：皿とほぼ同じ器形で、貼り付け高台をもつもの。出土数は極めて少ない。底部には回転糸切り痕を残す。

壺類

長頸壺が主体となるが、僅かに水瓶や短頸壺、小壺などもみられる。いずれも全形が分かる資料がないため、とくに底部の形態については不明点が多い。壺類の底部とした資料は、底面を粗雑なナデで仕上げた平底のものが圧倒的多数だが、回転糸切り痕の残る小振りな平底もある。その他に、高台杯より明らかに大きい高台付きの底部も壺類に分類した。

- ・**長頸壺**：頸部はやや短く太めで、口縁は上方に受け口状に折り返される。体部は肩が丸くなだらかに下り、底部にかけてすぼまっていく。底部はおそらく平底になると考えられる。頸部の付け根に突帯をもつものと、もたないものがある。
- ・**水瓶**：一般的な長頸壺の他に、長くて細い頸部をもつ、水瓶と考えられるものも少量みられる。頸部は口縁に向かってすぼまっており、口縁には長頸壺と同様の、受け口状の折り返しがみられる。胴部から底部にかけての形状は不明である。
- ・**短頸壺**：少量出土している。全形が分かる資料がなく、不明な点が多い。口径の広いもの、狭いものがあり、後者はおそらく蓋を伴ういわゆる薬壺形になると推定している。なお、後者には耳が付くものが1点見られる。
- ・**小壺**：極めて小型の壺である。出土数はごく僅かである。形態はいわゆる瓶子に近いが、個体差が大きいようである。

瓶類

器種が判断できたものは、平瓶と横瓶の2種類のみである。瓶類として分類したものは、調整と器壁の薄さから横瓶と考えた破片であるが、口縁の形態にバラエティーがあり、なかには横瓶サイズの小型甕とも考えられる資料も含めている。

- ・**平瓶**：把手部分と頸部のみ出土で、全形は不明である。出土資料はすべて小型のものである。
- ・**横瓶**：ほぼ全形が分かる資料が1点のみ出土している。頸部はほぼ直立し、口縁は僅かに外反しながら細く収めている。胴部は左右非対称ながら、俵形になると思われる。胴部には、外面に平行タタキ、内面に同心円の当て具痕が見られ、器壁を薄く仕上げている。また、円盤形に接合痕に沿って割れた破片も出土しており、粘土紐積みと円盤充填で成形されたとみられる。

鉢

全形が分かる資料はない。体部はボウル形で、口縁は受け口状に上方に折り返している。全般に器壁が薄く、内外面とも丁寧にナデが施されている。体部小片は壺と区別がつかず、壺類に分類したものにも鉢が含まれている可能性が高い。また、鉢底部と判断できた資料はないので、壺類に分類した高台底や平底のなかに鉢底部が含まれている可能性が高い。

鉄鉢形

上記の鉢以外に、金属器を模倣したと考えられる鉄鉢形の鉢も少量見られる。全形が分かる資料はないが、鉢より小型で、口縁は短く内傾し、体部は底に向かってすぼまっている。底部の形状は不明だが、やや尖底気味の丸底に復元できそうである。体部の調整に回転ヘラケズリを多用するほか、口縁の折り返しや収め方もシャープである。

蓋

つまみのあるもの、ないものの、大きく2種類の形態があるようである。つまみのある蓋は器高が低く、全体に扁平な形状である。口縁はおそらく僅かに下方に折り返したものが大半と思われる。つまみ自体は出土しておらず、その形状は不明である。杯類の蓋とみても良い大きさと形状であるが、杯類の出土量に比してあまりに少ないため、ごく一部の形態の杯類とセットとなるものか、他の器種とセットになると考えられる。つまみのないものは、つまみのあるものより小型で器高が高く、天井部から口縁にかけて丸みを帯びている。これらは壺類とセットになる可能性がある。

硯

小片がごく少量出土したに過ぎず、詳細は不明である。出土資料はいずれも風字硯と考えられる。

甕

全形が分かる資料はない。サイズにかなりの多様性があり、壺ほどの大きさの小型甕もある。小型品は、器形にもバラエティーがあるようである。大型甕は頸部から口縁にかけては大きく外に開き、多くが外面に粗雑な波状文を施している。口縁端部は受け口状に折り返すものが多い。胴部の形状は不明だが、大型のものは基本的に倒卵形と考えられる。例外的なものを除き、胴部の外面には平行タタキ、内面には同心円の当て具痕が見られる。

須恵器転用焼台

本遺跡出土の須恵器は全体に焼成が悪く軟質で、灰白色や褐色を呈した資料が大半を占める。しかし、一部に二次焼成を受けて完全な還元焼成となった資料も存在し、そのなかには転用焼台と考えられるものが含まれている。焼台としたものは、還元焼成で、かつ歪みが生じている、表面や破面に発泡やハジケが見られるなど、明らかに二次焼成を受けたと判断できることを必要条件とし、熔着物が存在する、自然釉が破面に付着している、積み痕が色調の変化として確認できるといった特徴を十分条件として器種認定した。もっとも、焼台として使用されていてもこの条件を満たしていない可能性もあるので、ここに分類した以上の数が存在したと考えられる。

焼台に分類した177点のうち172点が甕胴部片で、他に杯類を転用したものが3点(第136図：411・第140図：444・第162図：586)と、壺胴部片を転用したものが2点(第100図：22・掲載外1点)見られる。なお、瓦にも転用焼台となった可能性が高いものが見られるが、窯体を補強するために用いたものとの区別が難しく、焼台への分類は行わなかった。

(3)瓦の概要(表38)

出土した瓦はすべて破片資料で、完形に復元できるものは僅かしかない。内訳は平瓦が約9割を占めており、次いで丸瓦が多く、僅かに熨斗瓦、隅切瓦などの道具瓦がみられる。瓦当文様をもつ軒瓦は全く出土していない。ただし、平瓦のうちI類に分類した厚手のものは無文軒平瓦として使用された可能性を考える(第6章第3節)。

平瓦・丸瓦の特徴

平瓦、丸瓦はいずれも凸面整形が須恵器の甕瓶類にみられる平行タタキで、その後、基本的にタテ方向の粗雑な工具ナデやケズリ調整によりタタキ目を消している。なかには比較的丁寧なケズリ調整を施すものも僅かにみられるが、ナデやケズリ、指オサエが混在するものも多い。

次に凹面をみると、布目を部分的にナデ消すものが多い。ナデ消す部位に規則性は読み取れない。

布目は細布と粗布に大別したが、粗布には使用された布の痛み具合によりさらに細分できる可能性はある。

端面及び側面の調整は未調整のもの、端面、側面のみをナデやケズリ調整するもの、凸面側、または凹面側に面取りを施すものがあるが、面取りするものは少ない。凹凸面同様、粗雑な調整といえる。なお、後述する厚さによる分類との対応関係は明確ではない。

焼成については基本的に軟質なもの为主体と考えられる。須恵器窯や灰原から出土した資料は須恵質が多いが、これは焼台や窯の側壁に利用され、二次焼成を受けた結果と考えられる。一方、2区で出土した瓦の大部分は軟質で、褐色を呈しており、本来の焼成を示す可能性が高い。

胎土は砂礫の多寡によって密と粗に細分したが、基本的に砂礫をあまり含まない緻密な胎土である。

平瓦

成形技法はすべて一枚作りと考えられる。側面に布目が回り込むものも散見される。凸面整形の平行タタキが確認できたのは10点のみである。本遺跡の場合、法量、とりわけ厚さにバリエーションが認められることから、厚さを基準に細分を試みた。厚さは一個体内でもかなり幅をもつため、平均的な厚さを基準値とした。分類別の出土数量はⅢ類が最も多く、Ⅰ類は1割に満たない。なお、Ⅲ類はさらに大きさにより2種(Ⅲa類、Ⅲb類)に細分したが、分類できたのは残りの良い個体のみで、表38では一括している。

平瓦Ⅰ類 厚さが3.5cm以上の厚手のもの。なかには5cmを超えるものもある。唯一、完形に復元できた243は側面長51.2cm、広端長32.6cm、狭端長27.9cm、厚さは最大5cmである。重量は10kgと非常に重い。通常の平瓦とは考えにくく、無文軒平瓦の可能性をもつ。

平瓦Ⅱ類 厚さが3.0～3.4cmのやや厚手のもの。248の端面長が33.3cmであり、平瓦Ⅰ類と同一法量とみられる。一個体内での厚さの幅とみれば、平瓦Ⅰ類に含めるべきかもしれない。

平瓦Ⅲa類 厚さが1.6～2.9cmの一般的なもの。法量を復元できる資料はないが、平瓦Ⅰ、Ⅱ類と同一法量と推定される。

平瓦Ⅲb類 厚さはⅢa類と同じであるが、Ⅲa類より大きさが一回り小さい。側面長32cm前後、広端長20cm前後、狭端長16～18cm前後に復元される。重量は3～4kg程度と推定される。

平瓦Ⅳ類 厚さが1.5cm以下の薄手のもの。なかには1cm以下のものもある。広端長20cm、狭端長15cm前後と推定され、Ⅲb類とほぼ同一法量と考えられる。

丸瓦

すべて行基式である。凸面整形が確認できたものはない。分類は平瓦と同様、厚さを基準にした。分類別の出土比率も平瓦と変わらない。

丸瓦Ⅰ類 厚さが3.5cm以上の厚手のもの。法量を確認できる個体はないが、端面長17～18cm前後とみられる。

丸瓦Ⅱ類 厚さが3.0～3.4cmのやや厚手のもの。法量を復元できる個体はない。

丸瓦Ⅲ類 厚さが1.6～2.9cmの一般的なもの。広端長14～15cm、狭端長11～12cm前後に復元される。側面長は不明である。

丸瓦Ⅳ類 厚さが1.5cm以下の薄手のもの。平瓦と同様に1cm以下のものもある。側面長は不明ながら、端面長は10～15cm前後と幅があり、法量に大小が存在する可能性もある。

表38 瓦集計表

種別	厚さ	凸面調整	凹面布目	1区																																			
				窯1古段階		窯1新段階		窯1上層		窯2古段階		窯2新段階		窯2上層		灰原1		灰原2		灰原3		灰原		道1		道2													
				点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)										
平瓦	I類	タテケズリ	細布			1	1	753			3	0	1,361																										
			粗布	1	0	626	1	0	142	1	0	186	3	5	3,063	2	0	854					1	0	201	1	1	834	3	1	1,427	5	2	3,633	1	0	657		
			その他							1	0	741	1	0	301										1	0	234	2	1	759	1	0	751						
		タテナデ	細布				1	1	367						2	1	4,068																						
			粗布	2	1	1,522	3	0	1,906	4	1	2,285	10	4	7,083	10	4	14,860	1	0	847	12	2	4,062	2	0	851	2	1	514	2	0	408	8	2	5,384	3	2	11,552
			その他				1	0	524				3	0	1,549	4	1	3,783				3	0	1,047				1	0	58	2	0	1,468	3	0	1,248			
	ナデ	細布												1	0	822																							
		粗布									2	1	990							1	0	457																	
	不明	粗布										1	2	3,920																									
		その他												2	1	4,626				2	0	546				1	0	304	2	0	266								
	II類	タテケズリ	細布										1	1	386	2	0	1,231				3	0	617										1	0	240	1	1	296
			粗布																									2	0	510				4	0	922			
			その他																																				
		タテナデ	細布										1	1	512										1	1	323							1	0	203			
			粗布							2	1	683	3	2	4,146				9	3	2,352				3	1	441	2	0	372	2	0	480	1	0	252			
			その他				1	0	100				1	0	103	5	1	3,317	3	1	1,112	7	0	1,149				2	0	480				2	0	525	1	0	314
	ナデ	粗布																									1	0	103										
		不明	粗布																1	0	130																		
	III類	タテケズリ	細布										1	0	40																								
			粗布				1	0	217				3	2	1,108	5	2	3,548				3	0	766	1	0	219	5	1	773	4	1	853						
			その他				1	1	368	1	0	84	2	0	572	2	0	300				2	0	143				8	1	1,202	1	0	118				1	0	36
		タテナデ	細布							1	0	68				3	2	1,374				1	1	119				2	0	387									
			粗布	1	0	150	1	1	239	2	1	322	15	2	4,039	7	5	2,852	1	0	36	24	7	3,877	4	0	487	22	8	2,901	12	4	1,748	5	1	441	4	1	775
			その他				3	1	400	4	0	1,587	12	2	3,625	9	2	2,535				16	0	1,794	6	0	398	30	4	4,456	16	3	2,209	3	0	253	3	2	325
ナデ	粗布				1	0	137	1	0	137	1	0	40	2	0	412																							
	その他				1	0	110				1	0	143	1	0	279	1	0	40							1	1	678											
不明	粗布				2	0	175				1	0	142	1	1	107				6	2	450				1	0	185							1	0	32		
	その他							2	0	123	1	0	189	1	0	35				6	1	704				3	0	758	4	0	276								
IV類	タテケズリ	粗布																			3	1	346																
		その他																									4	1	304										
		不明	粗布				1	1	96				1	0	47				8	3	239	1	1	101	7	2	520	2	0	175	1	0	60	1	1	63			
	タテナデ	粗布										2	0	265				1	0	24	8	1	539				5	1	345	4	0	165	2	0	150	1	0	64	
		その他				1	0	12	1	0	56	2	1	496	1	1	45																						
		不明	粗布							1	1	44										1	0	21				2	1	41									
ナデ	粗布							1	0	18										6	1	137				7	1	284	4	1	159	2	0	19	4	0	158		
	その他										4	0	972							5	0	791				2	1	310	7	2	533								
厚さ不明	タテナデ	粗布				2	0	184				4	0	667	8	0	1,014	3	1	375	25	2	1,398				10	1	657	10	0	1,117	4	1	489				
		その他	1	0	36	2	0	32	2	0	153																												
	不明	粗布																			1	0	47				3	0	132										
		その他				1	0	76	1	0	2	5	1	1,415	3	0	420				14	1	874				9	0	696	5	1	334	6	0	235	1	0	83	
粗布	1	0	7	2	0	20	2	0	16	15	0	985	9	0	254	2	0	16	27	0	1,051	4	0	121	21	0	915	11	0	221	6	0	177	3	0	70			
九瓦	I類	タテナデ	粗布							1	0	400	1	0	163																								
			その他																1	0	188																		
	II類	タテナデ	粗布																			2	1	971				1	0	448				1	1	619	1	0	199
			その他																						1	1	124												
	III類	タテナデ	粗布							1	1	263																											
			その他																																				
		ナデ	粗布													1	0	269				4	2	638							3	2	418				2	0	357
			その他							1	0	229										5	0	741				1	0	210	1	0	46	1	1	413	2	0	217
	IV類	タテナデ	粗布																			1	0	67															
			その他																															1	1	80	1	0	125
	厚さ不明	タテナデ	粗布																																				
			その他																																				
縁斗瓦	1.6 ~ 2.9cm	タテナデ	粗布																																				
隅切瓦	3.5cm以上	タテナデ	粗布	1	1	1,908																																	
	1.5cm以下	タテナデ	粗布																									1	1	124									
その他	3.5cm以上	タテナデ	粗布																																				
	不明	不明	その他				1	0	730																														
合計				7	2																																		

